

第5章 総括

第1節 発掘調査成果からみた岩橋千塚古墳群の特質

(1) 古墳群における古墳の消長

岩橋千塚古墳群は、古墳時代前期から終末期の長期間にわたり継続的に古墳を築造した大規模古墳群で、現在までに978基の古墳を確認した。

古墳群は、4世紀以前に花山地区を中心に前方後円墳の築造により開始するが、5世紀には古墳築造を開始する地区があるものの造墓活動は低調である。しかし、6世紀になると、大型前方後円墳が連続して築造されるとともに、中・小型古墳の築造も爆発的に増加し、古墳群は最盛期を迎え、墳丘規模や築造数等から岩橋千塚古墳群が紀の川下流域の地域首長として卓越した存在になったと評価できる。その後、6世紀を通じて墳丘規模の縮小や墳形を変化させつつも古墳築造を継続し、7世紀中葉に古墳群は終焉を迎える。

(2) 古墳群における立地の変遷

岩橋千塚古墳群では、花山地区西部エリア及び井辺前山地区の北エリアなど古墳群の西部エリアで古墳築造が開始する。4世紀から6世紀初頭までは、首長墳とみられる最大規模墳は花山地区に築造された。しかし、古墳群が最盛期を迎え、終焉に至るまでの6～7世紀には、大谷山地区、大日山地区、井辺前山地区、和佐地区、寺内地区、井辺地区へと、首長墳は各地区に順次築造された。また、各地区では首長墳の築造を契機として中・小型古墳の築造が盛行する。言い換えると、古墳群の立地が古墳群の西部から東部へ変遷するように、墓域の中心も西部から東部へ変遷した。しかし、古墳群の縮小化する6世紀後葉以降には、首長墳も墓域の中心も、岩橋山塊の北斜面から南斜面へと移動した。

各地区において、地区最高地点に大型・中型前方後円墳が築造され、そこから派生する尾根上や斜面に中・小型古墳が立地する。中・小型古墳は6世紀前葉から中葉には爆発的に増加したが、6世紀前葉には尾根筋上を中心に、6世紀中葉には丘陵裾付近へと立地が拡大する傾向が認められる。

(3) 墳丘構造・埋葬施設からみた古墳群の特質

岩橋千塚古墳群は、異なる階層の古墳が、長期間、同一墓域内に築造された。その結果、一つの古墳群内に前方後円墳、円墳、方墳の多様な墳形と竪穴式石室、粘土槨、木棺直葬、箱式石棺、横穴式石室などの多様な埋葬施設が存在することとなり、古墳群内に古墳の多様性を看取することができる。

一方で、6世紀初頭以降には、岩橋千塚古墳群では独自性の高い構造とともに、棺を用いない埋葬習俗も畿内地域と大きく異なる岩橋型横穴式石室を創出した。そして、6～7世紀に築造された首長墳から中・小型古墳に至るすべての横穴式石室が岩橋型横穴式石室を採用する点

に、古墳群の強固な一体性を顕著に示す。ただし、独自性の高い岩橋型横穴式石室の系譜や構造の変遷過程にも、九州地域との継続的な影響関係の存在が想定された。

(4) 出土品からみた古墳群の特質

6世紀前葉には、紀の川下流域のみで確認できる形象埴輪など強い独自性・地域色を発現する。一方で、大王陵と共通する意匠をもつ家形埴輪や、九州及び瀬戸内並びに関東地域との関連性が指摘できる双脚輪状文形埴輪、5世紀から6世紀中葉まで出土する渡来系遺物からみた朝鮮半島との関わりなど、畿内地域や九州地域、朝鮮半島との積極的な交流の存在も確認できる。

また、古墳群が盛行する6世紀前葉以降には、副葬品、埴輪、土器の器種などに古墳群内の階層構成を顕在化させる。

第2節 岩橋千塚古墳群の範囲

第2章第2節(3)のとおり、岩橋千塚古墳群はその調査の進展とともに範囲を変化してきた。現在は、岩橋山塊に立地する古墳の範囲すべてを岩橋千塚古墳群と位置づけ、10地区に区分して整理しており、本報告書においてもその区分を踏襲してきた。

ここでは、『岩橋千塚古墳群保存活用計画』(和歌山県教育委員会2019)で示された岩橋千塚古墳群の本質的価値(第3章第1節)のうち、既往の調査成果により整理ができる本質的価値の2・3・4について整理することで、古墳群の範囲や地区の特性を明らかにしたい。

①本質的価値の指標の整理

「2. 全国最大級の大規模古墳群」として古墳の群集性を、「3. 長期にわたる各規模の前方後円墳、円墳、保王墳が同一墓域に築造」として3-1の墳形・墳丘規模の多様性、3-2の長期間にわたる築造時期を、「4. 埋葬施設にみる多様性と岩橋型横穴式石室にみる独自性」として埋葬施設の多様性を抽出し、この4つの指標により古墳分布状況を確認した。

2：古墳群の群集性(表9)

古墳の群集性が最も高い地区は、1haあたり9.1基の古墳が分布する前山B地区で、その他の地区においても1haあたり概ね1基以上が分布する。これに対し、和佐地区並びに山東地区は古墳数が少なく、1haあたり0.5基未満しか分布せず群集性は著しく低い。

3-1：墳形・墳丘規模の多様性(表3・4)

表3のとおり、ほとんどの地区で前方後円墳・円墳・方墳など複数の墳形が認められる。しかし、和佐地区の東エリア並びに山東地区のみ、円墳のみで構成される。

表9 地区別の古墳群集度

地区	群集性 【古墳数/地区 面積(ha)】	古墳数	地区面積 (ha)
花山	2.6	105	41
大谷山	1.3	23	19
大日山	2.7	68	26
前山A	5.9	152	26
前山B	9.2	319	35
和佐(西)	0.4	10	32
和佐(東)	0.2	5	27
井辺前山	1	69	69
井辺	7.2	43	6
寺内	1.1	153	142
山東	0.2	31	199
合計	1.6	978	622

表4のとおり、墳形ごとに墳丘規模を区分したが、墳形同様ほとんどの地区で複数の墳丘規模が認められた。これに対し、和佐地区並びに山東地区では、墳丘規模も全体の95%以上を占める小型円墳又は小型方墳のみの一区分にしか該当せず、和佐地区（東）と山東地区は、他の8地区と様相が大きく異なる。

3-2：長期にわたる築造時期（表10）

現在、築造時期が推定できる古墳は全体の1割（105基/978基）を数えることから、一定程度の傾向は把握できる。

各地区の調査件数及び築造開始時期などにも左右されるが、本報告で表示してきた9つの時期区分のうち、井辺・和佐（西・東）・山東地区以外では3時期以上の長期間の築造が確認できる。築造時期が短いこの3つの地区では、いずれも6世紀中葉以降に築造が開始されている。

表10 築造時期別古墳数

地区	4C 以前	5C 前葉	5C 中葉	5C 後葉	6C 初頭	6C 前葉	6C 中葉	6C 後葉	7C 以降	該当 項目数
花山	2	3		1	2		1	1	1	7
大谷山			1		2	5		2	2	5
大日山					1	9		1		3
前山A				2		2	7	2	2	5
前山B						4	12	6	1	4
和佐（西）							1	1		2
和佐（東）								1	1	2
井辺前山	1				3	3		1		4
井辺									1	1
寺内			1	1		1		7	9	5
山東								1		1
合計	3 2.9%	3 2.9%	2 1.9%	4 3.8%	8 7.6%	24 22.9%	21 20.0%	23 21.9%	17 16.2%	105

4：埋葬施設の多様性（表5）

井辺・和佐（東・西）・山東地区の3地区を除き、各地区で複数種類の埋葬施設が確認される。なお、この3地区では、築造時期と関係していることも想定されるが、横穴式石室のみが認められるとともに、古墳群の一つの特徴として指摘した一墳丘多葬墳も確認できない。

②岩橋千塚古墳群の範囲の検討

現在、岩橋千塚古墳群は、地理的に東は和歌山市東郊の矢田峠、北は宮井川、南は和田川、西は和歌山平野の範囲に広がる岩橋山塊（天王塚山・岩橋前山・大日山・大谷山・花山・福飯ヶ峯）の東西約3.5km、南北約2.5kmの範囲に所在すると定義している。

この範囲に立地する古墳群について、本質的価値に基づく4つの指標を地区ごとに分析してきた。その結果、地区ごとの本質的価値の4つの指標の全てにおいて、和佐地区（東）と山東地区は、他の9つの地区と明らかに異なる状況であることが確認できた。この二つの地区の古墳のうち、調査履歴のある古墳を概観したい。和佐地区の和坂南垣内1号墳では、埋葬施設の仕切石が石室主軸に直交するとともに、山東地区の山東12号墳では奥壁に巨石を利用し、典型的な岩橋型横穴式石室と異なる特徴が確認されている。ただし、古墳の立地や岩橋型横穴式石室を採用する点などは岩橋千塚古墳群の一画を占めるといえるものの、岩橋型横穴式石室の属性が異なるとともに4つの指標でも異なる特徴を備える点で古墳群の本質的価値を備えると積極的に評価しがたい。

以上により、和佐（東）・山東地区を除く9地区が、岩橋千塚古墳群の本質的価値を備える重要な範囲として位置づけられる。なお、この範囲は平成時代に拡大される以前の昭和時代後半に示された岩橋千塚古墳群の範囲に概ね一致する。

第3節 岩橋千塚古墳群の歴史的評価

本報告では、岩橋千塚古墳群は4世紀以前に古墳築造を開始し、5世紀は造墓活動が低調であるものの、6世紀に墳丘規模及び古墳築造数ともに最盛期を迎え、7世紀中葉までに造墓活動を終焉するとした。言い換えれば、前期から終末期にわたり古墳時代のほぼ全時期にわたり978基の古墳が築造された大規模古墳群という位置づけである。また、岩橋千塚古墳群の本質的価値のいくつかの要素に基づき、古墳群の枢要な地域は花山地区、大谷山地区、大日山地区、前山A地区、前山B地区、和佐地区（西）、井辺前山地区、井辺地区、寺内地区と評価した。さらに、岩橋千塚古墳群の造墓活動が本格的に活発化するの5世紀末以降であることから、当該期以降の古墳を中心に分析を実施した結果、以下のような特徴を指摘した。

6世紀初頭以降の首長墳は、古墳群北西の花山地区から、岩橋山塊北斜面を中心に大谷山地区、大日山地区、井辺前山地区、和佐地区へと順次東に展開した後、山塊南斜面の寺内地区、井辺地区へと移動した。古墳群の最盛期を迎えた6世紀中葉までの首長墳は山塊北斜面の各地区の最高所付近に前方後円墳が築造されたのに対し、6世紀後葉以降は山塊南斜面の中腹又は裾部へ立地が変化すると同時に、首長墳の墳形変化、規模の縮小化が発生した。中・小型古墳は造墓活動が低調な5世紀でも4つの地区で築造が確認できるものの、6世紀初頭以降は首長墳の築造を契機として各地区の築造数が増加する傾向が認められ、古墳群の中心的な墓域も首長墳同様の移動状況を確認した。

首長墳の墳丘構造と外表施設は、6世紀初頭から中葉の4基の首長墳では盾形基壇と埴輪を備える大谷山22号墳・大日山35号墳・井辺八幡山古墳の3基から基壇と埴輪を備えない天王塚古墳へと変化する。盾形基壇と埴輪を備える3基の前方後円墳も、別区・造り出しの施設と埴輪配置の変遷から経時的な変化とともに、列島規模の階層構成が顕在化した可能性も指摘した。また、首長墳のみならず中・小型古墳も含めて、墳丘規格性が低い岩橋千塚古墳群の特徴が発生した要因として、起伏に富んだ山塊上に展開した古墳の立地とともに、山塊岩盤を掘り込んで構築した岩橋型横穴式石室の構築技術の存在を想定した。

現在確認できる埋葬施設は、竪穴系が約3割、横穴系が約7割で、横穴系はいずれも岩橋型横穴式石室である。竪穴系埋葬施設は、横穴式石室導入以降も一墳丘多葬の墳丘に横穴式石室の副次的な埋葬施設として継続した。岩橋型横穴式石室は6世紀前葉から中葉には紀の川下流域を中心に分布を拡大するが、6世紀中葉以降に分布域の縮小化と畿内系横穴式石室の増加から、岩橋千塚古墳群の影響力の低下を認めた。6世紀には、金銅装馬具・甲冑や鉄鏃の組成、量、形象埴輪の組成、円筒埴輪の段構成という副葬品・埴輪と墳丘規模、墳形に明確な相関関係が認められ、古墳群の階層構成の顕在化が顕著であるとした。

6世紀初頭以降、岩橋千塚古墳群では形象埴輪の一部や岩橋型横穴式石室などに強い独自性を発現する一方、岩橋型横穴式石室の変遷過程や棺を用いない埋葬習俗が畿内地域と異なることは、独自性だけでなく古墳群の一体性を顕著に表出する。一方で、大王陵と共通する意匠の家形埴輪や九州地域などに関連性が指摘できる石室構造や形象埴輪など他地域との積極的な交流の存在も確認した。

岩橋千塚古墳群は、古墳の築造状況、墳形、墳丘規模や出土遺物の内容などから、5世紀以前は紀の川下流域の一地域首長の墓域に過ぎなかった。しかし、6世紀初頭以降、紀の川下流

域で卓越した地域首長とその首長を支えた集団の墓域となった。さらにその地域首長は、列島内の同時期の墳丘規模との比較から列島内でも有数の地域首長にまで伸長したと評価した。

岩橋千塚古墳群の造墓集団の勢力伸長の要因の一つとして、岩橋山塊の西側、紀の川下流域南岸の平野で大規模水路が開削された結果、5世紀以降に同地域の集団の再編成が生じ、強固な勢力基盤を確保した可能性も指摘した。なお、岩橋千塚古墳群全体及び現時点では古墳群の形成の契機となったと位置づけた花山地区では、各々西から東へと時間の経過とともに墓域を拡張していく形成過程を認めた。井辺前山地区を含め西側を意識した古墳築造開始の背景の一つには、造墓集団が勢力基盤となった山塊西側、紀の川下流域南岸平野部を意識した公算が高い。また、岩橋千塚古墳群の造墓集団の勢力基盤とした地域は、文献史料研究から岩橋千塚古墳群の造墓集団として想定された紀直の勢力範囲と矛盾しない。

岩橋千塚古墳群は、古墳時代前期から終末期まで長期間にわたり古墳が継続的に築造された大規模古墳群であり、古墳築造の盛衰や階層構成の変化などの古墳築造動向の詳細が一定程度判明している。岩橋千塚古墳群の古墳築造動向に変化が発生した時期は、畿内地域を中心とした列島内の古墳時代に認められる古墳や社会の変動時期と概ね一致する。このことは、岩橋千塚古墳群が一古墳群にもかかわらず、地域首長が畿内政権の影響を受容した在り方を、古墳時代全般を通じて辿ることのできる古墳群であることを示す。特に、岩橋千塚古墳群で最盛期を迎えた6世紀以降は、首長墳だけでなく中・小型古墳も含めた墳形、副葬品、外表施設などの属性分析により、岩橋千塚古墳群の階層構成を含めた地域勢力の実態を示す古墳群としても重要である。

さらに、岩橋千塚古墳群の造墓集団が地域首長として勢力を伸長した6世紀前葉は、畿内政権内における政治変動が発生した時期に合致する。このことは、畿内政権の政治変動という外的要因と5世紀代に紀の川下流域での勢力基盤を固めた内的要因とが重なったことにより、岩橋千塚古墳群の造墓集団の勢力伸長の契機となったとともに、岩橋千塚古墳群が畿内政権の様相を最も鋭敏に反映した古墳群の一つと評価できることを示す。また、当該期は畿内政権が朝鮮半島を中心とする東アジアの情勢の影響を受けた時期にもあたり、岩橋千塚古墳群における古墳築造動向も畿内政権を介して東アジアの情勢の影響の結果と位置づけることができる。

岩橋千塚古墳群の特徴と歴史的評価を整理してきた。今後は、本報告を取りまとめた内容に基づき、岩橋千塚古墳群の本質的価値の再整理を行う必要がある。ただし、築造時期等の概要が判明した古墳は、1割にあたる約100基に過ぎない。付章で一部を紹介するが、古墳群の時期や評価に影響を与える伝岩橋千塚古墳群出土品の悉皆的な調査も未実施である。古墳群の範囲には吉礼砂羅谷窯跡や森小手穂埴輪窯跡が所在するが、古墳群への埴輪の需給関係も不明である。さらに、独自性豊かな岩橋型横穴式石室の構築石材である結晶片岩の採取地の検討も必要である。新たな分布調査成果や既往の調査成果を取りまとめた本総括報告書の刊行により一定の成果を得たものの、岩橋千塚古墳群には多くの課題が山積している。岩橋千塚古墳群の実態解明のためには、今後の継続した調査研究が必要である。